

大豆で吸実性カメムシ類、フタスジヒメハムシの増加が懸念されます。

吸実性カメムシ類（写真1～4）は成虫、幼虫とも子実を直接吸汁加害します。幼虫はほ場外へ移動せずに加害を続けるため、被害粒が増加します。特に、子実肥大中後期の加害では、子実の吸汁痕（写真5）の変色や、変形程度が小さくなるため機械選別が難しく、被害粒混入により品質が大きく低下します。

また、フタスジヒメハムシ成虫（写真6）は葉、莢等を加害します。特に、莢の食害痕から雑菌が感染し子実が黒く変色する黒斑粒（写真7）は機械選別が難しい被害粒です。

8月15～16日の大豆ほ場における見取り調査（県内15地点平均）では、吸実性カメムシ類の発生ほ場率は過去10年間と比べて最も高く（本年43%、平年10%、図）、頭数も多く確認できる状況です。なかにはすでに幼虫の発生も見られます。

フタスジヒメハムシも発生ほ場率が平年を上回っています（本年27%、平年15%）。

今回の調査時の大豆の生育ステージは開花終期前後のほ場が中心で、すでに害虫の発生が多くなっていますので、今後、子実の肥大初期から加害されやすく、減収や品質低下の可能性が高まります。

向こう1か月の平均気温は高いと予想され、今後さらに増加が懸念されます。下記のとおり、早期に適切な防除を行うとともに、発生の動向に十分留意しましょう。

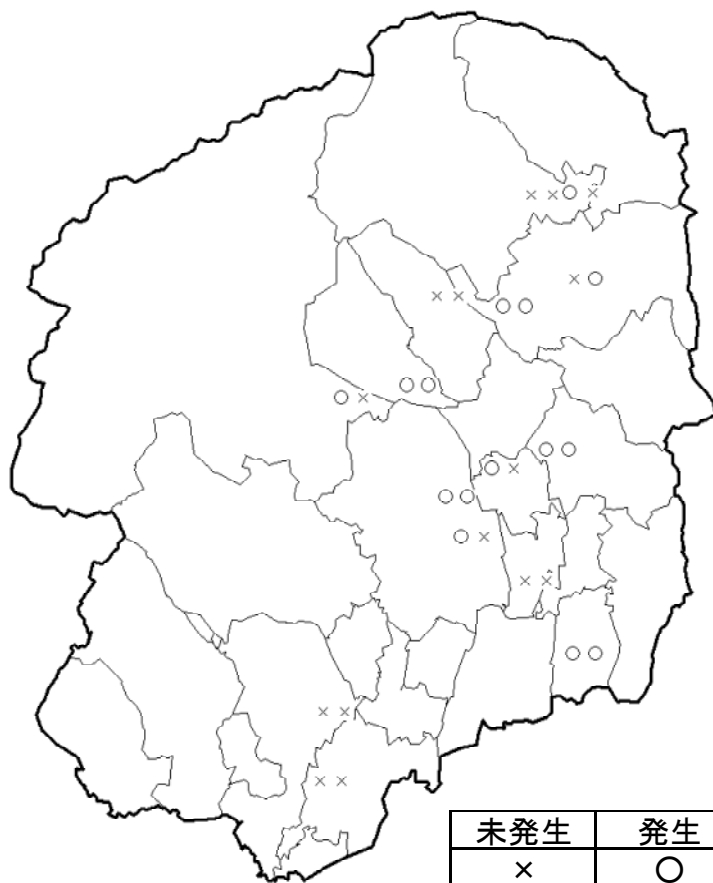


写真1 ホソヘリカメムシ



写真2 イチモンジカメムシ

図 吸実性カメムシ類成幼虫の地点別発生状況



写真3 アオクサカメムシ



写真4 ブチヒゲカメムシ

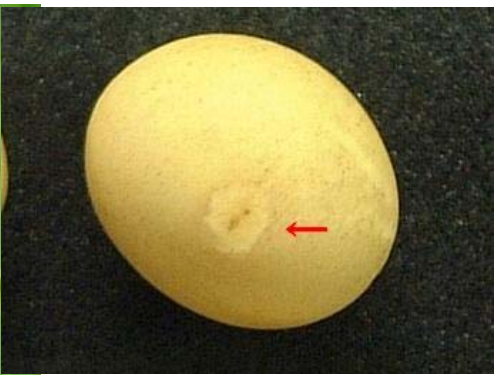


写真5 子実の吸汁痕



写真6 フトスジヒメハムシ成虫



写真7 フトスジヒメハムシによる
莢の被害と黒斑粒

【防除対策】

- ・ 開花期の15日後から次のいずれかの薬剤を、10～14日間隔で3～5回使用する。
なお、薬剤は莢によくかかるように散布する。

表 大豆のカメムシ類とフトスジヒメハムシに登録のある主な薬剤

(平成24年8月17日現在)

農薬名	希釈倍数 又は使用量	使用時期 ／本剤の使用回数	成分 ／成分の総使用回数
スタークル液剤10	1000倍	収穫7日前まで／2回以内	ジノテフラン ／3回以内 ^{※1}
スタークルメイト液剤10			
ダントツフロアブル	2500～5000倍	収穫7日前まで／3回以内	クロチアニジン ／4回以内 ^{※2}
トレボン乳剤	1000倍	収穫14日前まで／2回以内	エトフェンプロックス ／2回以内
トレボン粉剤DL 〈豆類(種実)〉	4kg/10a	収穫14日前まで／2回以内	エトフェンプロックス ／2回以内

※1 は種時の土壌混和は1回以内、散布は2回以内

※2 は種時の土壌混和は1回以内、散布は3回以内

詳しくは農業環境指導センター (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>) までお問い合わせください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012